草原の学校に黒板250枚贈る

モンゴル文字復興へ

ほうろう引き採用

朝青龍関、ちばてつやさんらも応援

モンゴルの草原の子どもたちに、日本から黒板250枚のプレゼントが届けられた。社会主義時代に禁じられていたモンゴル文字の復興を目指す周囲を応援しようと、文化人類学者らでつくるNPO法人「モンゴルパートナーシップ研究所」（MoPI、大阪市）が呼び掛け、全国の黒板メーカーの協力で実現。モンゴル出身の大相撲大関の朝青龍関や漫画家のちばてつやさんらも応援した。

【藤後野里子】

MoPIスタッフの松嶋愛さん(28)が昨夏、草原地帯の学校を訪れた際、黒板があまりにも古くて使いにくいのが気になった。「50年以上使っている黒板はツルツルで、そのままでは書けないため、先生が黒板をぞうきんでぬらしては、湿っている間に字を書いていた」（松嶋さん）という。

MoPIは今年1月から黒板1枚当たり2万円を募る活動を開始。これまでに500万円を超える寄付金が集まっている。

活動を知った「全国黒板工業連盟」（東京都）の加盟57社も、黒板の製作を申し出た。モンゴルの湿度や気温などを聞き、表面は耐久性のあるほうろう引きの黒板を採用したという。縦90ミリ、横180ミリで日本の学校で使うものよりやや小ぶりの黒板となった。

MoPIは、集まった資金を利用してモンゴル文字のセミナーも実施。8月19、20日に、首都ウランバートルに教育大学の専門家を招き、全国の国語教師ら約90人を集めて、伝統文字の教授法などの講義をした。伝統文字は民主化が進んだ90年代に復興の動きがあったが、文字を教えられる教師がほとんどいない現状にあるという。

2日間のセミナー終了後、参加した教師たちに日本から届いた黒板を1、2枚ずつ持ち帰ってもらった。MoPIの小長谷有紀・国立民族学博物館助教授（文化人類学）は「草原にある学校は600校。全学校に行き届くまで援助を続けて、交流を深めていきたい」と話している。問い合わせは、MoPI（06・4395・2220）まで。

モンゴル中央県アルガラント郡の学校に届いた日本製の黒板